

79

山科言経の日記に見る秀吉期に於ける妊婦と そのサポートネットワーク

アンドリュウ・ゴープル

Department of History, University of Oregon, USA / 大阪市立大学文学部日本学術振興会招へい研究者

江戸時代以前には文献史料（医学書）以外には家庭医学特に産婦人科の医療を明らかにする資料は少ない。幸い十六世紀末の豊臣秀吉期に二十年間に渡る大阪天満と京都六条堀川の本願寺での専業医として活動をした山科言経の日記が残っている。その中で妊婦の治療とその患者に関する当時の家庭医学の実態をある程度復元出来る記載が多い。ここで産前産後の記録を中心にその実態と妊婦を支えたと思われる女性サポートネットワークに触れます。

その当時は曲直瀬流医学に象徴するように新たな医療文化が台頭し定着してきた。その様相の一つは妊婦・懐妊・胎前時のプロアクティブな健康管理であり、その中で薬（養生薬、気付薬、諸処方名、個人の常備薬である持薬）に関する新認識と新常識、患者の自身で作成する身体状態や症状を示す所労目録や医者が提供する適当な食物を指摘する胎前禁物書の流布、並びに頻繁な診脈の可能性等に注目する。

言経が治療した産前産後の煩いには次のような物が確認される。（医者が投薬した薬や患者側が頼んだ処方〔例、愛州薬〕や種類〔例、ハヤメ薬〕は殆んど記されているが省略する）。墮胎後の問題は少ないが例えば「三月ニテ子ヲリ、相煩う」。産前問題の例えは：単に「産前所労」；産婦浮腫；懐妊四ヶ月血下；懐妊七八ヶ月血ヲオル、；八月に成り懐妊ヘソノアタリ腹痛；腹シタヘサカリ苦敷、手ノ筋痛。断産（流産）の問題の例えは：単に断産所労；絶死、腹痛、旧冬断産以後；断産三十日斗也血下；七八ヶ月已然断産也大事ニ大煩。出産時問題の例えは：難産の場合は四日産気、二日間未産、難産之由遅。産後の問題の例えは：単に「産後」；胞衣不下（多例）；胞衣五六日不下；腰痛；眩暈；頭痛、下血；シリ腹痛ム；悪血不下；熱気、泄瀉、頭痛；胎死その後ニ讒語、大小便下、腫気、小便數有、小便不禁。

それらの妊婦の症状や患者の状態を医師に伝えるのには当然ながら本人に限らず周りの人物の関与と支援を認めざるを得ない。伝達の一例：十一週間前に子供を生んだ梅庵（大村由己）の女中（妻）より「近所女産後腹痛・痢疾云々」、「梅庵女中ヨリ近所産後熱フルイ云々」。長期に渡る（六年間の間）他の女性の状態を医者に知らせた。一例は絵屋彦四郎の妻：例えば、臨産の隣の女の為に催生散を頼む；美の屋与十朗妻近ニ産也云々ので言経がハヤメ薬を与えた；知人の妻、産後胎衣不下なので薬を頼む；等。記載された伝達の分析は次のとおり。産前45回の内訳：23回家族の人物、22回近所の人若しくは知人。断産（流産）32回の内訳：15回家族の人物、17回近所の人若しくは知人。産後59回の内訳：35回家族の人物、24回近所の人若しくは知人。

以上の事から推測すると次の二点を挙げられる。第一は妊婦の様子を医療にかかわる医者に伝える者は家族のものだけではなく近所の人々又は知人であった。第二は条件が付けられるがそれは殆どが女性だった事である。その意義は出産の過程の中で女性たちが互いに助け合って妊婦の健康と医療を支援し、サポートするネットワークは常に存在したと確認出来ることである。